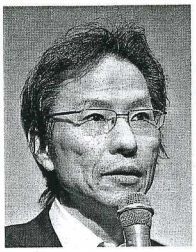
草の根 海外支援

災害復興の課題や被災地支援の実践について意見を交わす「'09年関西学院大学災害復興制度研究所フォーラム」（同研究所主催、朝日新聞社後援）が11、12日、兵庫県西宮市の関西学院会館で開かれた。大規模災害が世界各地で頻発する中、国家や民族の壁を越え、どのように国際支援に取り組んだらいいのか。東大大学院教授の姜尚中氏による特別講演と、海外支援の現場で活動するNGOスタッフや研究者らによるシンポジウムを中心に、フォーラムの様子を紹介する。（シンポの司会は堂﨑益輝・関西学院大教授）

特別講演

地域の知恵 共有し活用



東京大大学院情報学環教授
姜 尚中さん（58）

カン・サンジュン　国際基督教大助教授などを経て現職。専門は政治学、政治思想史。「ナショナリズムの克服」「悩む力」など著書多数。

海外支援について語る前に、私がキーコンセプトになると思っている「地域」について話したい。

地域は、町内会から始まって、東アジア地域という形もあるし、大きな単位の部分であると同時に、より小さな単位から見れば全体とも言える。

東北の中山間地域の再生に取り組む人たちから、地域には五つ必要なものがあると聞いた。生態系や生計、伝統文化などだ。これらは自己完結するのではなく、より上位の単位の部分をなしながら、一方で全体をなしている。災害という形態もあるし、支援する側が自分たちの生きている社会で「地域」をどうとらえるかというのがない限り、相手もよく見えず、パターン化されたイメージで支援される側を考えることになるのではないか。どんな国にも地域は必ずあり、その街の手方が見えない限りは支援される側の「誰を」が見えてこない。

ではどのように「地域」を知るか。情報と知識があるだけでは本当の相手は見えてこない。私は地域の中で営まれる人々の知恵というものが必要だと思う。

私の母親は生涯、旧暦で1年を過ごしてきた。非常に古くさい、前近代的なものように思えたが、考えてみると自然の諸動物リズムと人知とが渾然一体となっていた。潮の干満がいかに行われ、いつ月の満ち引きが始まったかを、西暦に慣れた私には全くわからない。おそらく今、地域社会を考えていくうえで最も必要なのは、そうした知恵なのではないか。

蓄えられた知恵を支援する側がどのように共有して伝えていくことができるのかが、国際的な支援を考えていくうえで最も重要で、その方面に日本は人材を振り向け、育てていくべきだと思う。

もう一つ重要なのは判断力。どの国に対して支援でき、どの国にできないのか。例えば北朝鮮で自然災害が起きた場合、支援の手を日本から差し伸べることができるのか。政治体制のいかんを問わず、災害で困っている人がいたら手を差し伸べるべきだというのが一般原則だろうが、支援する側の世論が成熟しない限り、難しい。

私自身は、地域と地域とのインターローカルな支援が今後もっと行われるべきだと思う。

阪神大震災における人々の記憶を体験はなかなかデータ化しにくく文字化したりできない。しかし、そういう有形無形のものを我々が共有しあい、伝えていくことが結局、回りめぐって海外支援のありかたにも大きく影響を与えていくのではないか。

プレセッション

答えは現場にある

CODE海外災害援助
市民センター事務局長
村井 雅清さん（58）

むらい・まさきよ　阪神大震災後から救援活動に取り組む。被災地NGO協働センター代表や神戸学院大客員教授などを務める。

――復興とは何か

被災者の自立など様々な答えがあり、一つではない。だが復興を考えるうえで常に現場がヒントになる。ある大阪の大学生は「何もできないかもしれないけど、何かはできるんじゃないか」と被災地に駆けつけた。机上で議論するよりとにかく現場で実践する。答えはそこから生まれる。

――北朝鮮にも人道支援として援助をしました

いくら独裁政権だからといっても、そこに一人でも餓死する子どもがいるのなら援助する。国家の問題は意識しながら、一方で救援と援助をする。交流が生まれると、少しずつ外に門戸が開かざるを得ない状況になり、変わっていく。甘いかもしれないが。

（聞き手＝山中茂樹・関西学院大教授）

シンポ

堂﨑　まず、皆さんが海外支援で体験したことや感じたことを共有したい。

斉藤　最初はCODE海外災害援助市民センター（神戸市）の一員として海外で復興支援にあたった。アフガニスタンで現地女性の素顔に触れ、防災面から見た女性問題にかかわるきっかけになった。女性は助けられる存在というイメージを持たれやすいが、がれきの動かし方など、その場でできる技術や知恵を身につけてもらえるような訓練に携わっている。女性たちにはいざという時、自分も助ける側にたれるという自信を持ち始めた。

ショウ　01年にインド西部で大きな地震があり、日本の技術を移転しながら一緒に学ぶことを考えた。その際、現地の人とどう信頼関係をつくるかが課題になった。建物を造る時も現地の材料を使い、何を造るかの判断も任せて一緒に作業をした。鉄筋コンクリートでなく、現地にある材料で造ることを目の前で見せられたことで、我々にもできるんだという彼らの自信につながった。

吉椿　CODEで復興支援に取り組んでいる。災害後できるだけ早く現場に入り、まず現地の人たちがもともとどんな暮らしをしていたのかかたちを聞き、どんな復興がいいのか一緒に考える。少ない資金、少ない人数のため限界はあるが、現地の人たちと専門家をつなぐこともできる。日々顔を合わせていくと、暮らしぶりがよく見えてくる。そうすれば、その暮らしにあった復興の形が見えてくる。

加藤　四川大地震で都江堰市の復興計画の提案に参加した。我々を含めた世界の10チームがわずか一カ月ほど検討して計画を出した。限られた時間の中では、自分たちの経験に根ざした「正論」を伝えることが重要だ。被災者の暮らしの連続性を保つための復興に加え、今後の発展も考え、新たな住民組織や住民参加型の地域づくりも提案した。これは押しつけようとしたわけではなく、受け入れてもらおうとしたわけでもない。先方になにがしかの刺激になればいいのではないか。一方で、国や地域特性を超えた普遍的なものを重視する。それぞれの地域の歴史や文化、宗教をどうとらえるか。理解するのか、それとも乗り越えていくのか。

斉藤　バングラデシュでは91年のサイクロン災害で、女性の死者が男性よりも圧倒的に多かった。理由の一つに女性は男性の許可なしに避難所に行けなかったという事情もあった。これは文化という一言で片づける問題ではないと感じた。でもそこで相手に「間違っている」とは言わなかった。ただ、そのままでいいのか、もう一度話し合ってもらうことに徹した。防災の側面から、文化として定着した女性の地位や立場も少しずつ見直されればと思う。

加藤　中国の復興計画は、民間投資をいかに引き込むかの視点が入っている。日本にはそういう発想が弱く、逆にいい刺激になった。計画づくりが上意下達である点に限らず、基本的に日本とは全く違う社会システムが存在している。社会の違いを前提に、支援する側から「正論」をぶつけられることで、支援される側が客観的に自分たちのものを整理しておくことも重要だ。

堂﨑　それぞれの地域の歴史や文化、宗教をどうとらえるか。理解するのか、それとも乗り越えていくのか。

斉藤　バングラデシュでは91年のサイクロン災害で、女性の死者が男性よりも圧倒的に多かった。理由の一つに女性は男性の許可なしに避難所に行けなかったという事情もあった。これは文化という一言で片づける問題ではないと感じた。でもそこで相手に「間違っている」とは言わなかった。ただ、そのままでいいのか、もう一度話し合ってもらうことに徹した。防災の側面から、文化として定着した女性の地位や立場も少しずつ見直されればと思う。

加藤　中国の復興計画は、民間投資をいかに引き込むかの視点が入っている。日本にはそういう発想が弱く、逆にいい刺激になった。計画づくりが上意下達である点に限らず、基本的に日本とは全く違う社会システムが存在している。社会の違いを前提に、支援する側から「正論」をぶつけられることで、支援される側が客観的に自分たちを見直す、あるいは再発見する機会にもなればいい。

ショウ　サイクロン被害を受けたミャンマーに行ったが、現地政府にのつながりを持ちにくかった。そこで以前から知り合いだった工学系の会長を通じて技術的な支援を呼び出した。ヤンゴン工科大の若い学生にも一緒に被災地にいってもらい、現地調査した。国際支援の障害になる政治の壁は、草の根のつながりで越えることができた。

吉椿　四川大地震で同じ村に通い、がれきの撤去作業をした。毎日カップめんばかり食べていたら、地元の女性が料理をつくってくれた。その女性は我々の世話を焼くことで元気になっていった。一度帰国し、岩手・宮城内陸地震が起きた後に中国に戻ったら、その女性に「何度も電話したよ。私もボランティアに行こうかと思ったよ」と言われた。当然文化は違うが、一緒に飯を食べて話しながら、ともに悩むことが大事だと思う。人と人はつながることで変わっていく。

ショウ　ちょっと違う視点から言いたい。インドやバングラデシュではNGOの活動が盛んで、優秀な大学を出た学生がNGOに就職する。私の友人も一流の都市工学を学び、NGOをつくった。ちゃんと生活できるだけの給料が準備されているからだ。日本の学生にNGOで働くか聞くと「防災は興味があるし論文の中身も実践したいが、ある程度給料がないと難しい」と言う。日本のNGOはすごい力を持っているが、制度化などうつなげるかが課題だ。せっかくのノウハウがあまり外部に発信できていないのも惜しい。

堂﨑　最後に、日本はどういう形で災害復興支援に携わっていくべきだろうか。

加藤　支援するだけではなく、そのあり方を検証する必要もある。検証したものを国際的に確実に共有して次に備え、役立てるのが大事。日本は少なくともアジア地域でそれを共有する中心的な役割を担うべきだ。

吉椿　地震に見舞われた中越など、日本の過疎地も高齢化ですごく過酷な状態だ。中国に行くと、日本の農村はどうなっているのか逆に聞かれることも多い。「日本もこういう問題があるんだよ」と、いいことだけでなく、そうでない面も伝えていくことが必要ではないか。

ショウ　専門や大学間の壁をどう越えていくかも大事な課題だ。また、支援は2、3年で終わるのではなく、もっと長い時間をかけてみることも大切だ。

斉藤　これだけ災害が多いと、災害関係者の中にどうしても慣れが出てくる。それでは被災者と向き合えない。どれだけその人の痛みを共有したいと思えるか、その上で一緒に何ができるか考えなければならない。

国連地域開発センター
防災計画専門家兼事務所研究員
斉藤 容子さん（30）

さいとう・ようこ　01年にインド西部地震のボランティアに参加。CODE海外災害援助市民センターのスタッフを経て現職。

東京大大学院助教
加藤 孝明さん（41）

かとう・たかあき　都市計画、都市防災が専門。四川大地震では都江堰市の復興計画の公募に東大・慶大チームの一員として参加。

CODE海外災害援助
市民センタースタッフ
吉椿 雅道さん（41）

よしつばき・まさみち　阪神大震災直後に神戸市の兵庫区と長田区でボランティア活動。中国・四川省の被災地にも長期滞在。

京都大大学院准教授
ショウ ラジブさん（40）

インド・コルカタ出身。94年に来日、大阪市立大大学院博士課程修了。国連地域開発センター研究員を経て現職。

助ける訓練 女性に自信

普遍的な案 常に準備を

共に暮らし解決探ろう

NGOの力 待遇面カギ